

第1問 次の例文の空欄中に当てはまる言葉を選択肢から一つ選び、その言葉の読みを記述せよ。

例文

- (1) 会合では波風を立てぬよう、周囲に した。
- (2) 謝恩会に着ていく服が無かったため、 が悪い。
- (3) ある芸能人の噂が している。
- (4) 上司の発言が新しいプロジェクトの となった。
- (5) 敵対者の多数派工作という におちいった。
- (6) 新しい の提唱によって、これまでの考え方が覆された。
- (7) ある課題について、内外の文献を した。
- (8) この訓示は、我が一族の によって維持されてきた。
- (9) いじめの問題構造を、学校教育だけでなく社会全体に して議論する。
- (10) 二つの事象には、共通の原理が している。

選択肢

- (ア) 背反 (イ) 恣意 (ウ) 融和 (エ) 演繹 (オ) 敷衍 (カ) 遁減 (キ) 所与 (ク) 平衡
- (ケ) 流布 (コ) 介在 (サ) 系譜 (シ) 嚆矢 (ス) 誤謬 (セ) 蓋然 (ソ) 陥穽 (タ) 体裁
- (チ) 回帰 (ツ) 概念 (テ) 涉猟 (ト) 乖離

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。作問の都合上、表記を改めた箇所がある。

たとえば「シューベルト」という文字があるとき、大部分の人々はこれを文字どおり読むでしょうが、ごくわずかな人は読み間違えるかもしれません。「シートベルト」などと。この間違いはどのように生じるのでしょうか。視力の弱い人が、文字を読みそこなうことが考えられます。しかし、視力とは関係なく、うっかりと読み間違いが起きもするのです。この「うっかり」はどこから生じるのでしょうか。そこから認識のメカニズムを垣間見ることができるかもしれません。

もしわたしたちが単語を構成している文字をひとつひとつ読んでいるとしたら、読み間違いは生じないでしょう。「シ」「ユ」「ー」「ベ」「ル」「ト」と、ひと文字ずつ確認していれば、「シ」「ー」「ト」「ベ」「ル」「ト」とは読まないはずで、読み間違いは、「読んでいない」ことに起因することになります。本当のところ、わたしたちは本を「読む」と称して、その実「読んでいない」のかもしれませんが、そして^①そこから認識のほころびが生じるのです。

では文字を読む時に、実際には何が起きているのでしょうか。どのように「間違い」は起きたのでしょうか。「シューベルト」を「シートベルト」と読み間違えることがあるとしたら、その理由は、明らかに、二つの言葉が視覚的に似ているからです。ここで、こういう推測が成り立ちます。わたしたちは文字のひとつひとつを「読んでいる」のではなく、ただ「見ている」のだ、と。すなわち「シューベルト」という単語を見ているのです。

さらにいえば、単語を形成しているひとつひとつの文字ではなく、あくまでも全体の「形」を見て、判断しているのです。だからこそ、「シートベルト」という、「形」のよく似た単語との読み間違いが生じるのです。「シ」という単語の頭に、「ー」、それに「ベルト」はまったく同じであり、全体として、両者はあまりによく似ています。重要なのはあくまでも形なのであり、そのため、外見上似たものと混同することがあるのです。とり違えはこうしたつまずきから生じると考えられます。

こうして認識は「形の看(し)ユ」から始まることとなります。物の本質を表すギリシャ語の「アイデア」は、「見る」を意味する動詞イデーネン *idein* に由来し、本来は「見られたもの」「形」を表すことが思い浮かびます。

② 上記の読み間違いの例は、さらに重要な地点へとわたしたちを導きます。誤認は「シューベルト」という情報をわたしのなか

にある「シートベルト」という知識と関連づけてしまったことであつたのでした。とり違えは見誤りにあつたというより、むしろ誤つた「関連づけ」にあつたのです。「シューベルト」という語の形を見て、わたしのなかの「シューベルト」(それも「形」で収納されている)と符合させていれば、問題はなかつたのです。

すなわち、認識とは「見た情報を知識と照らし合わせること」となります。

誤認はこの「照らし合わせ」の手続きの段階で、誤りが生じたことから起きると考えることができます。だからこんなことも起きます。文章を読んでいて、まったく知らない言葉が出てくると、面くらいます。「何だこれ」と、目を(ii)コらすことさえあります。たとえば初めての英単語に出くわすと、アルファベットをひとつひとつ読んでみたりもするでしょう。知っている単語だったら、形を見るだけで判別できたのに、です。こうして、知らない言葉に出会うと、特別な困難さが生じるようになります。これはわたしたちが実際は読んでいないこと、形で判断しているために、未知のものには対応できないことの例(iii)シヨウでもあります。

別のいい方をしましょう。ここでの困難さは「照合」すべきものがなかったことを意味するに違いありません。とり違えは「誤つたものと符合させてしまったこと」に起因したのですが、まったく新しい情報と出会うと、「符号させるべきものがない」状況に立ち至るのです。いわば自分の知識のなかを検索しても、該当するものが見あたらないといった状態です。そうした困難さが特別であるゆえんは、照合すべきものが「ある」という普通の状態に対して、「ない」というまったく別の状況が起きているからです。

認識は照合だということ。このことは次のような特殊な状況からも推察できます。「十八歳ですべての記憶を失くした青年の手記」があります。これは交通事故によって起きた出来事の報告ですが、意識がリセット状態に置かれたら、人間はどうなるかという貴重な記録でもあります。……(中略)……

手記は担ぎ込まれた病院から始まっています。そこで、まず病室で得体の知れないもの、でも何かしら快いもの、に出会います。それは(iv)カン葉植物でしたが、青年にとっては、それが何かわかりません。わたしたちは植物を見たときに、植物についてのあらゆる情報が蘇ります。前の文脈でいえば、わたしのなかの「植物」が参照されるのです。そして、そうした知識に従

って、植物に対処するのです。ところがそうした情報が(v)カイ無だとなるか。青年はその得体の知れないものに手を伸ばし、葉をちぎってしまします。植物にどれくらい力をかけるとどうなるか、という知識がまったくないからです。

こうして^③純粹意識のなかで世界と出会うことになります。たとえば食事を出されたら、まずお皿をかじる、といったことなのです。わたしたちにとってあたりまえの、何が食べ物で、何が器であるかという基本的な知識もないからです。わたしたちが物事を理解して、合理的に行動しているのは、それが何であるかという参照すべき知識があるからだとしたことなのです。

それだけではありません。青年は次第にうるさい人間に嫌気がさし、静かな場所を好むようになります。こうして彼にとってはお気に入りの場所が見つかります。「すごくしずかなところ」にきた。石と石のあいだにすわってよりかかる。まっくらの中に入る。ずいぶんと歩いてきたなあ。でもここはすごく落ちついていられる。音もなにもしないから。

場所は夜の墓場でした。「墓場」がもつイメージがいつさいないなら、そこは「静か」で、「すごく落ち着く場所」でしかないのです。つまり、知識はわたしたちに認識を可能としているだけでなく、わたしたちの情動の源ともなっている、ということなのです。「夜の墓場」というだけで、ぞっとして鳥肌が立つような、あの情動です。わたしたちは何と深く既成概念に衝き動かされていることでしょうか。

さらに、普通の人にとって、夜の墓場は怖いだけでなく、怖く、気味悪く「見える」ものでもあります。してみると、知識とは感覚がとり込んだ情報を照合するものであるだけでなく、感覚そのものにも影響を与えているに違いありません。いわば知識が感覚を予測し、誘導さえするのです。先に、未知の単語に出くわした時の特別な困難さに触れましたが、それは読めないといふだけでなく、実は「見えない」ことにも起因していません。知らないものは、文字どおり、よく「見えない」からです。こうして、知らない単語に出会うと、まさに「目をコラス」ことになります。また、たとえば外国人の顔は誰も彼も似たように見えてしまったことになりす。よく見慣れた日本人なら、すぐに違いがわかります。「よく見える」のです。初めて聴く音楽は、聴き慣れた音楽よりも、わかりにくく、味わうどころか「聴こえにくい」ことにさえなるのです。自分のなかに照合すべき情報がないからです。そして、そのことが感覚にまで影響を及ぼしているからです。……(中略)……

こうして考えてみると、何かを認識するとか、何かを感じるといったことは、果たして受動的なのかという疑問が浮かんでき

ます。というのも、外からの情報がわたしのなかの知識と照らし合わされることによって初めて認識されるとしたら、明らかに、そこには「わたし」の参与があるからです。わたしと切り離された、純然たる客観的な「事実」の存在など危うくなります。もっとつきつめると、感覚さえ知識に誘導されているとしたら、わたしたちはありのままの世界を見ていないことにもなりません。赤い球体を見て、わたしたちはすぐそれをリングだと判断するでしょう。しかし、セザンヌ^(注1) Paul Cézanne (一八三九～一九〇六) が描きたかったのは、わたしたちが習慣的な判断や「決めつけ」をもちこんでいない、ありのままのリングだったかもしれません。それは必ずしも赤くないし、純粋な球体でないかもしれないのです。知識によって、わたしたちは物を明確に見ることができるとしたら、そこには必ず現実とはそぐわないものが入り込んでいるはずで、というのも、知識とは一般へと抽象化された概念であるのに対し、現実はいくまでも個別だからです。これはカント^(注2) のいう「物自体」へ到達できない人間の宿命にほかなりません。

④ しかしここで観念論を展開する必要はありません。「シューベルト」を「シートベルト」と読み間違えた人にはある傾向が見られるはずで、少なくとも、その人たちは車に関心があるはずで、車に無関心な音楽好きの人が、そう間違えるはずはないでしょう。つまり、この読み間違いは、認識においてわたしたちが参与することの決定的な現れであり、その「わたし」とは抽象的な人間一般などではなく、まさにこの「わたし」、つまり車に興味があるとか、「シートベルトを締めなさい」などといつもいわれている「わたし」にほかならないのです。認識とは、ほかの誰でもない、この現在のわたしが投影される積極的な行為なのです。

田村 和紀夫 著 「音楽とは何か ミューズの扉を開く七つの鍵」 講談社、二〇一二年、一八四ページ～一九〇ページ、一部改

(注1) セザンヌ……ポール・セザンヌ。フランスの画家。独自の表現でリングを多く描き、「リングの画家」とも呼ばれた。

(注2) カント……イマヌエル・カント。ドイツの哲学者。『純粋理性批判』等の著作がある。一七二四～一八〇四。

問一 二重傍線部(i)～(v)のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「そこから認識のほころびが生じる」の意味を説明した次の文において、空欄【 】に入れるべき語句を漢字2字で記せ。なお、本文中の表現を抜き出すだけで十分と考えられる場合はそうしてよい。

ある単語を誤読することは、その文字列全体を一つの【 】として捉え、それを外見上似たものと混同することによって生じる。

問三 傍線部②「上記の読み間違いの例は、さらに重要な地点へとわたしたちを導きます」の意味を説明した次の文において、空欄【 】に入れるべき語句を15字以内で記せ。なお、本文中の表現を抜き出すだけで十分と考えられる場合はそうしてよい。

文字の誤認はかたちの視覚的判断の誤りによって発生するが、それは、見た情報を【 】というプロセスにおいて誤りが発生するからだと推論できる。

問四 傍線部③「純粋意識のなかで世界と出会う」の意味を説明した次の文において、空欄【 】に入れるべき語句を10字以内で記せ。なお、本文中の表現を抜き出すだけで十分と考えられる場合はそうしてよい。

【 】を通じて、外界の情報がそのまま入ってくる。

問五 傍線部④「しかしここで観念論を展開する必要はありません」とあるが、著者がこのように述べる理由を説明した次の文章において、空欄【ア】【イ】【ウ】に入れるべき語句を、それぞれ2字で答えよ。なお、本文中の表現を抜き出すだけで十分と考えられる場合はそうしてよい。

著者は、人間が何かを認識したり感じたりすることが本当に【ア】的なのかという問いに対して、実はそれは【イ】的な行為であるという解答を導こうとしている。その目的に鑑みて、私たちはどこまでありのままの世界を正確に見られるのかという問いの探究は必要なく、その行為に現在のわたしの【ウ】が投影されることを確認するだけで十分だから。

問六 この文章の論旨に合致するものには○を、合致しないものには×を付けなさい。

ア 我々が視覚的に似ている文字列を読み違えることがあるのは、文字をひとつひとつ読んでいるのではなく、文字列の全体を見ているからである。

イ 我々は純然たる客観的な世界を見ているのではなく、現在の私の感覚や知識に誘導された世界を見ている。

ウ 我々は目にした対象物を自分の知識と照合できない場合、既に持っている知識から独自の認識を構成する。

エ 我々が合理的に行動できているのは、自分の中に、外界の物事に関する何らかの情報を既に有しているからである。

オ 我々の持っている物事に関する知識は、認識につながるだけでなく、それに付随した感覚をも誘導する働きを持つ。

カ 知識とは一般へと抽象化された概念だが、その抽象化の程度が不十分だと、知識を用いて物を正確に見ることができなくなる。

第3問 次の文章を読み、後の問いに答えよ。作問の都合上、表記を改めた箇所がある。

AI（注1）は判断を創出しているのではなく、ひとびとのあらゆる判断を、ひとが感覚できないものまでのさまざまなデータを含め、ネット上のクラウド（注2）を介して繋がりあつて、ひとが記憶できないほどの大量のデータ（ビッグデータ）を用いてシミュレートするだけである。

正しい判断をするのではなく、正しいとされた判断をさらにデータとしてインプットして、正しいとされる判断の確率を上げていくだけだ。AIスマートロボット（注3）がギャグをいうにしても、それは世界中のひとたちの笑いの反応をクラウドを通じてフィードバックしているからであつて、それらにとってはちつともおかしなことではないのである。

AIにとって、人間は光学センサーの眼のまえにいて、クラウドという霧のなかにいて、クラウド上のデータのなから抽出される統計的存在者でしかない。正しさを判断するのはどこまでいっても人間であり、そもそも「正しさ」は人間にとってのものでしかない。機械にとっての正しさは、精確に作動すること、バグがないことではないのだ。誤りも、ただ訂正すべきデータにすぎず、それらにとっては、恥ずべきことなのではない。したがって、もしAIにありとあらゆる判断を任せてしまふとしたら、それは確かに何らかの判断を示すだろうし、その判断は、いずれにせよ多くのひとが納得する妥当な判断ではあるだろうが、しかし、そこに「未来」はない。

未来とは、現在よりもよい状態になつていくはずの、これから先のある時点のことである。単に時間の未来ということであれば、いつの時代にも未来はあるが、それはひとが期待して、それに向かつて努力しようとする「未来」ではない。AIの説く未来は、現在の延長ではない。

AIの前提する未来においては、ただ時だけが刻一刻と経ち、暦がその数を積み上げていく。それは、時間測定法における未来であつて、われわれの「未来」ではない。そこに夢や希望はない。未来という語が夢や希望という語と相重なつていた時代が終わり、未来という語で、せいぜい似たような要素がくり返し姿を現わす退屈な現在か、あるいはいたるところ、現在の廃墟としての、破滅と悲惨とが組み込まれた疑似過去が待ち受けるばかりとなる。

AIの判断は、過去に起こったことを未来に引き伸ばして予想する、その推測を詳細に徹底したものである。ルールがあつて条件の変化しないものに対しては最強であるが、あり得ないことに挑戦するとか、いつもと違ったことをやってみるといった判断は、そこにはない。ところが、そうした異例のことをなそうとする判断の向こうにこそ、人間の考える「未来」がある。

ルーティン化した業務における判断に対し、その判断の帰結から生じる悲劇についての感性こそが、人間の判断を賦活して、いつもとは異なつた判断へとひとを差し向ける。夢や希望という名のもとに、明確なイメージがないとしても、ひとはそれぞれに「未来」に向けて判断しており、その場合の「課題の解決」だけを考えているわけではないのである。

AIが普及するということは、社会におけるさまざまな業務の運営が自動化され、人間からするとすべてが成りゆきまかせで何とかなるようになるということである。そこには、判断に意義を与えてきた「未来」を考える人間がいなくなってしまう。

だから、わたしがAIに心配するのは、AIが人類を未来の消失から救ってくれそうもないということなのだ。むしろ、それに加担する装置なのではないかということだ。

従来ひとびとが抵抗してきたのは、勝手な、あるいは間違つた判断をする政治権力に対してであつた。だが、そうした、責任が追及されるべき権力も、AI機械が入り込んで、きっと淡泊なものになつてしまうだろう。その結果として起こる事故や不祥事や争いは、一人ひとりが受忍するものでしなくなつてしまふだろう。状況をよりよいものへと改善したり、理想社会に向かうとすることなど、だれも思いつけなくなつてしまふだろう。

近代（モダン）にこそ、「未来」があつた。歴史の発展段階があると前提されていたからである。「つぎの時代」があると前提されていたからである。

今日、「未来」がないのは、社会が悪いから、悲観的材料しかないからではない。AIが出現したからでもない。逆に、AIが普及し得る社会が到来したから、AIが出現した。

すなわち、それがポストモダン社会である。ポストモダンとは、近代が終わつたということである。近代が終わつたということとは、「未来」がなくなつたということなのである。

なぜポストモダンになったのかとか、どうやったらまた近代のようになるのかとか、尋ねてみたいひともいるだろう。だが、モダンという「進歩する歴史」の時代を支えた人間の意識が摩耗してしまったということなのだ。ひとびとはただ、そのような意識が虚しいと知ってしまった。人間が歴史の主人公ではないということを知ってしまった。モダンの神話が消えて、西
欧文明の価値が暴落した、ということなのだ。

AIが普及しつつあること自体は「未来」なのではないか、と思うひともいるかもしれない。便利で楽な社会である。しかし、その普及は人類の進歩ではない。人間が歴史の主役の座から降りるのだから。

AI、およびそれを活用した機械とロボットとネットの普及は、そのような意味での「未来」ではない。未来ではないということは、成りゆきまかせということだ——どうなるかは、やってみなければ分からない、ということだ。

数十年後にははつきりしてくるだろうが、新しい環境のなかで、人間性も変わるだろう。だから、そうしたことを嘆くひともいなくなっているに違いない。

管理社会になるといつて反発しているひとも、プライバシーが失われると気にしているひとも、機械の方が人間より優れていることに憤りを感じているひとも、自分が担当すべきだった仕事をいつのまにか機械がしていることに気づくひとも、すべていなくなってしまうているだろう。われわれはそれほど悪いことをしたつもりではなかったのに。

いまだからこんな話ができる。というのも、「確かに何か変だ」と感じるひとたちが、まだ大勢いるだろうからである。とはいえ、パソコンのディスプレイが少しずつ汚れていつて色が薄くなってしまっていて、ある日ふと拭いてみたら、驚くほど鮮やかな色になったというようなことが、おそらく数十年のあいだに起こるのだし、しかしそのときは、だれも自分の社会認識のディスプレイを拭いてみようなどとは、思いつきもしないのだ。

人間が減っていく、その分、それを埋めあわせるかのようにAIとロボットが普及していく。そうした事態が受け容れられつつあるということだ。つまり、AIが普及する理由は、ひとにやらせるよりも効率がよいという点にある。ロボットが普及する理由は、その仕事人間にできても、人件費よりも安価にできるからである。AIは、ひとをパラダイスに住まわせるためではなく、結果的には、ひとをこの平凡な惑星から放逐するために普及させられていく。

つまり、現代の最大の問題は、いま起こりつつある人間性の危機に対して、AIがまったく役に立たないということであり、かえって危機に対処する人間を減らしていくだろうということである。それなのに、ひとびとはAIに頼ろうとしているのだ。

AIの普及は人類の素晴らしい未来を作るのではなく、人類の「未来」を、未来という概念もろともに奪い去る。ひとは、過去に向けて「なぜこうなったか」という問いを抱くであろうか、あるいは未来に向けて「AIによってどうなるのか」と問うであろうか——もしかして、それをAIに問うのであろうか。

しかし、歴史に因果性はない。「あることをしたら、その結果がこうなる」という必然的連関はない。なるほど別のことをしたら別のようななったという可能性はある。だからといって、そのことが、その後の結果の「原因」なのではない。

歴史はすべて偶然だといいたいのではない。歴史は総体的に推移する。現われる現象は、どんなに違うジャンルでも、その総体的推移の結果なのであり、それらがみなおなじひとつの方向を指しているように捉えなおされる現象である。歴史の原因よりも、その推移のなかで、ひとびとの感性や発想が次第に変化していくのを理解することが重要なのである。

船木 亨 著 「現代思想講義 ―人間の終焉と近未来社会のゆくえ」筑摩書房、二〇一八年、四二ページ〜四九ページ、一部改

(注1) AI……人工知能。

(注2) クラウド……インターネット上のさまざまなハードウェアやソフトウェアの資源をクラウド(雲)として捉えたもの。

ユーザーはそうしたサーバー群の存在を意識することなく、さまざまな処理をサービスとして利用することができる。

(『コトバンク』に基づく。)

(注3) スマートロボット……インターネットにつながれたロボット。

(注4) バグ……プログラム中に含まれた誤り。

問一 この文章を380字以上400字以内で要約せよ。アルファベットは1マスに1字ずつ書くこと。採点に際しては、文章から抽出された諸要素を、あなたがどのように結びつけているのかを、特に重視する。

問二 この文章における筆者の主張を90字以上100字以内で書け。アルファベットは1マスに1字ずつ書くこと。採点に際しては、文章から抽出された諸要素を、あなたがどのように結びつけているのかを、特に重視する。